

(3) 教職員がワクワクする教育イノベーション

教育が大きな転換期を迎える今、「教職員がワクワクする教育イノベーション」は、教師自身が楽しみながら子どもと共に学校を創り上げ、非認知能力を育む未来志向の学びを実現するための指針として位置付けることができます。

① 現場の主体性を引き出すため

教職員一人ひとりが教育のデザイナーとして創意工夫を発揮し、授業やカリキュラムに主体的に関わることで、子どもたちの非認知能力や未来の可能性を最大化し、学校全体の教育力向上につなげることができます。

ア 授業デザイン会議の開催

説明：自校の特色を生かし、教科横断で探究学習やプロジェクト型授業を企画
ねらい：教員が自主的に授業改善の企画力を高め、子どもたちの学びに転換する。
イノベーション：教員の主体性が学校全体の教育の質向上を牽引し、子どもたちの探究心を刺激する。

イ 小さな改善の積み重ね

説明：毎週授業で1つ工夫を加え、成果を共有して改善習慣を育む。
ねらい：日常的な試行錯誤を通じて、教員自身の授業力や創意工夫力を持続的に向上させる。
イノベーション：積み重ねによる改善が学校文化となり、全員で子どもたちの未来力を育む基盤となる。

ウ ピアレビュー制度の活用

説明：他教員の授業を観察し、互いにフィードバックする仕組みを導入する。
ねらい：自律的な授業力向上・学び合いを促進し、専門性と協働力を高める。
イノベーション：相互評価の文化が定着することで、教員全体の教育デザイン力が底上げされ、子どもたちの非認知能力育成につながる。

② 負担感ではなく、高揚感を醸成するため

非認知能力の育成を単なる業務や義務としてではなく、子どもたちの劇的な成長を実感できる「ワクワクする体験」として捉えることで、教職員の創造性や熱意を引き出し、教育活動全体の質向上につなげることができます。

ア 成果だけでなく挑戦を褒める

説明：テスト結果での評価ではなく、挑戦や意欲の行動を具体的に称賛する。
ねらい：子どもたちの挑戦心を育み、失敗から学ぶ姿勢を形成すると同時に、教員自身も指導の喜びを実感する。
イノベーション：努力や成長の可視化が、学校全体で挑戦を称賛する文化を生み、非認知能力育成を加速させる。

イ 体験型ワークショップの導入

説明：探究活動や地域課題解決型プロジェクトを授業に組み込み、教員も子どもと共に体験する。

ねらい：教員自身が学びのプロセスに関与することで、指導の楽しさや創造性を実感し、子どもの学びに共感する力を高める。

イノベーション：教員と子どもが共に挑戦する体験が、授業デザインや教育文化の革新につながる。

ウ 成功体験の可視化

説明：成果や取り組みの過程を掲示板やポートフォリオで共有し、子ども・教員双方が達成感を味わえる場を作る。

ねらい：学習過程の可視化により、子どもの自己肯定感や挑戦意欲を高め、教員も教育成果を実感できる。

イノベーション：成功体験の共有が学校全体でのモチベーション向上を生み、非認知能力育成を支える文化を醸成する。

③ 未来への希望を共有するため

非認知能力の育成を通じて、教職員と子どもが共に成長し、未来に希望を持てる学校文化を創ることを目的とする。子どもたちの心の力を育むことで、教員も変化を楽しみ、創造性を高めることが可能となります。

ア 未来ビジョン共有会の開催

説明：学校全体で、子どもたちの未来に何を残すかをテーマに意見交換を行う。

ねらい：教職員全員が目指す教育の方向性を共通認識として持ち、日々の指導の指針とする。

イノベーション：共通の未来像が明確になることで、教育活動全体の統一感と創造的な挑戦が生まれる。

イ 子どもと教員の成長記録の共有

説明：非認知能力の成長記録や教員の指導改善を定期的に振り返る。

ねらい：成長の可視化により、子どもと教員双方の達成感ややりがいを実感する。

イノベーション：成長記録の共有が、学校全体で継続的な改善と学びの文化を促進する。

ウ 地域・保護者との未来会議

説明：地域や保護者を交え、子どもたちの未来に必要な力についてディスカッションする。

ねらい：教育の透明性と協働を高め、子どもの社会的スキルや非認知能力を育む。

イノベーション：家庭・地域と連携した教育活動が、学校文化と地域文化の一体化を生み出す。